

氏 名	三宅 岳 史
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 410 号
学位授与の日付	平 成 19 年 11 月 26 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 思 想 文 化 学 専 攻
学位論文題目	ベルクソン哲学の生成における実証科学の役割

論文調査委員 (主査) 教授 伊藤邦武 教授 小林道夫 准教授 出口康夫

論 文 内 容 の 要 旨

本論は、ベルクソン哲学と同時代の実証科学との関係を研究し、その関係のもとでベルクソン哲学が生成していく様子を捉えようとした試みである。ベルクソン哲学研究のなかでは、彼の哲学と科学の関係の分析は傍流をなしてきたが、近年この傾向は改められている。従来はフランス・スピリチュアリズムの潮流のもとで解釈されがちであったこの哲学のうちに、現代における科学と哲学の相補的協力の萌芽的試みが豊かに含まれていることに、多くの研究者たちが気付きつつあるからである。実証科学といっても全ての実証科学の分野を扱うのはあまりにも範囲が広すぎるので、本論で扱うのは主として力学あるいは物理学である。これは当時の実証科学が力学や物理学をモデルにしており、まず基盤にある力学・物理学との関係を抑えておくことが必要であると考えられたためである。

論文全体は序章と結論を別にして、七つの章からなっており、各章はそれぞれ、「時間と空間」、「力とエネルギー」、「エントロピー」、「偶然性」、「非決定性」、「相対性理論」、「量子力学」との関連で、ベルクソン哲学の理論を解釈、評価している。その主たる論点は以下の通りである。

第一章「二種類の多数性の起源－時間と空間」では、ベルクソン哲学の根本的な概念となる二種類の多数性、すなわち持続と空間、の起源の一つを探究する。ベルクソン自身は、数学や力学から心理学へと関心が移るなかで持続概念が成立したと述べている。論者はこの移行には、当時哲学や科学で問題になっていた連続性の問題が背景にあり、とりわけベルクソンがゼノンのパラドックスを独自の仕方と解いていく過程で、ベルクソン哲学に独自の連続性の概念が生まれ、それが持続概念と空間概念という二種類の多数性の起源にあるのではないかと、ということ論じる。それによれば、ベルクソンはもはや事物の無限分割可能性ではなく、現在と先行する状態が相互浸透するプロセスの不可分性によって連続性を捉えているのである。論者はさらに、二種類の多数性の発想のもとにはリーマン幾何学の多様体理論があるのではないかと、というドゥルーズのテーゼを吟味する。ベルクソンが『試論』で引用し、『物質と記憶』第四章の議論の一部で下敷きとしているスタロの著作には、確かにリーマン幾何学が登場しているが、むしろ、クルノーの著作などに現れる二種類の連続性概念のほうが、ライブニッツの流れを引き、ベルクソンの多数性の発想にも近いというのが論者の解釈である。

第二章「力とエネルギー」では、ベルクソン哲学にとって劣らず重要な力とエネルギーの問題を扱う。この問題が重要になるのは、エネルギー保存則の成立によって、力学的決定論が物理学ととりわけ生理学にまで拡張され、決定論と自由の問題を構成する背景になっていたからであり、さらにまた、機械論と力動論という物質に関する二つの体系が関わり、この二つの体系が『創造的進化』に至るまで、ベルクソン哲学の物質理論の底流をなしているからである。機械論は物質の本性を延長と考え、惰性的な力と必然的な因果によって構成される体系であり、ベルクソンはこれをデカルトやスピノザの哲学に帰している。力動論はまず意識に似た能動的で自由な力から出発し、その自由の度合いを少なくしていくことで物質に到達するのであり、因果関係としては偶然性や可能性を含むとされ、ベルクソンはこれをライブニッツの哲学に帰している。ベルクソンはこのどちらも最終的には心的事象の自由を守るとして、どちらかにコミットすることはない。したがって、『試

論』では物質理論に関しては、この二つの理論のどちらをとるかという問題は開いたままである。一方心身因果に関する問題に関して、論者は、『試論』第一章で引用される、ウィリアム・ジェイムズの「努力の感じ」の論文を参照する。この論文は当時の哲学や生理学に受け入れられた、心理学や生理学によって力学の力概念の内実を与えるとされていた理論を破壊し、ベルクソンもこの理論の前提を受け入れていると見られる。このことから『試論』では、心身因果の問題は保留されているとみなすことができるとされる。また、心的事象の自由については、ベルクソンは保存則の満たす条件が可逆系を構成するとし、心的事象に関してはそのような条件が成立しないことを示す。心的事象にはこのように自由が帰せられるのだが、ベルクソンは有機体に関しては、この非可逆性を見かけ上のものである可能性があるとして保留する。それゆえ『試論』では、身体のレベルでは、自由の問題は慎重に扱われると理解される。

第三章「エントロピー」では、エントロピー概念がベルクソン哲学にもたらした影響を考慮する。ティボーデが『ベルクソンの哲学』において指摘しているように、『創造的進化』では大きな役割を果たしているエントロピー概念が『試論』には現れていない。論者は、エントロピー概念が徐々に力学に還元できないことが分かり始め、エネルギー論と原子論の対立を背景に大きな問題になりはじめていたのは、ちょうど『試論』が書かれていたころであり、おそらくこの概念的布置の変更中であったため、『試論』では明確な形でエントロピー概念が導入されなかったと推断する。エントロピー概念が導入されるのは『創造的進化』第一章においてである。ここでは有機体の内部の現象から、一方は創造・組織化・生成・連続・予見不可能性のプロセス、他方は破壊・分解・死・非連続・反復可能性という二つの対立する非可逆的なプロセスが腑分けされる。ベルクソンはとりわけコープなどの議論を参照しており、この二つのプロセスが、「上昇」と「下降」の二つの傾向が対立する創造的進化のコスモロジーに拡大され、そして同じく前者にエントロピー減少の傾向が、後者に増大する傾向が割り当てられる、という形でエントロピー概念が導入されたのだと判断される。また、ここで取り入れられるエントロピー概念は、エネルギー論と原子論の概念のうちどちらに近いのかにかんして、論者は、非可逆性を実在と捉える点で、ベルクソンはデュエムやポアンカレなどのエネルギー論に近く、エントロピーの増大と減少が少ない確率であっても反転可能と考えている点で、ボルツマンの原子論に近いと整理する。

第四章「偶然性」では、エントロピー概念でも重要であった、偶然性の概念に関して分析を行う。この章の分析のために論者は九鬼周造の偶然性の分類を拠り所にする。それによると、偶然性は何よりも必然性の否定概念であり、必然性には目的々必然と因果的必然が考えられるため、偶然性にも目的々偶然と因果的偶然が考えられる。この四つがどのように組み合わせるかで、様々な偶然と必然に対する立場が可能になる。この整理の後に、論者は、ベルクソン哲学に影響を与えたブトゥールの偶然性と科学の関係の議論を概観する。ブトゥールは、因果的偶然でも、目的々必然と結びつく contingency を擁護し、目的々偶然と結びつく hasard を退けることで、存在から力学、物理学、生理学、社会学といった階層構造が創発するという、コントの実証主義を足がかりにアリストテレス・ライプニッツ的なスピリチュアリズムを展開した。論者は、ベルクソンも機械論的な盲目的偶然を退け、力動論的な因果的偶然を擁護するという形で（ただしベルクソンは用語を識別しない）、ブトゥールの議論を独自の形で受け継いでいることを確認する。また、『創造的進化』の偶然性批判はどうか考えればよいのかが問題になるが、しかしこれに関しても、偶然性を根底においてしまうような盲目的偶然の考えが批判されており、二つの秩序の反転が擁護されるという点では、目的々必然と因果的偶然の結合は、『進化』の体系のなかには内的に取り込まれている。そしてこの結合が、生物秩序の創造性や創発性という重要な役割を担うことになる、と解釈される。

第五章「計算不能なエネルギーと非決定性」では、この生物や有機体の秩序の生成に現れる、計算あるいは測定不可能なエネルギーと非決定性の関係に関して考察を進める。論者はこの概念の由来にかんして、ベルクソンが『物質と記憶』で引用しているピュパンのニューロン説を概観する。それによると、当時の神経系の研究は、ゴルジやゲルラッハが主張した網状組織説とピュパンが示すニューロン説が対立しており、この背後には連続と非連続の対立が見られた。論者はここまでの論考で、ベルクソンが基本的に連続性の側に立つという解釈を示しているが、『物質と記憶』では非連続的なニューロン説の立場がとられていることを指摘する。そしてニューロンの接合が次々に変動することによって、神経系の偶然性や非決定性が考えられているのを確認する。ただし、『物質と記憶』ではこのニューロンのネットワークにどのように前述の測定不能なエネルギーが介在し、非決定的なシステムになるのかは明かされない。それが明らかになるのは『創造的進化』においてである。ここでは、生命がエントロピー増大の傾向を反転するには至らないものの、生命のごく微小なエントロピー減少

の傾向、すなわち秩序生成の努力が、計測不可能なエネルギーと結びつけられる。生物はこの微小な傾向を爆発的に増幅させるために、栄養分を蓄えており、神経系はこの非決定性の貯蔵庫として捉えられる。この火薬の爆発や引き金を引くという比喩は、物理学者ブシネスクの議論が引用しているクルノーやド・サン＝ヴナンの議論が使われており、測定不可能なエネルギーという概念が、様々な分野の科学や哲学的な議論と付き合い合わされることで、その内実を変え、洗練されてきたことが伺われる。

第六章「科学と哲学の相補性と相対性理論」では、このような思考の延長線上に、相対性理論とベルクソン哲学の関係を論じた『持続と同時性』が位置づけられることを見る。論者はベルクソン哲学と科学との関係を相補性と呼び、科学に対する内在的な批判や、科学と哲学の協働、哲学における概念の創造、実証科学による哲学的直観の始動など、そこに様々な側面があることを論じる。そして、ベルクソンが実在・知覚・記号の諸関係の区分をめぐって相対論に対して提出した批判は、固有時をリアルなものとして捉える点では妥当であるものの、時間の収縮や弛緩が知覚できないと考える点では誤っているなど、具体的な相対論の場面においてどのように相補が行われたのかを検討する。論者はベルクソンの議論にはたしかに不備があり、科学理論とかみ合わない面があることを認めたとうえで、どのような点でベルクソン哲学の持続と相対性理論の時空が補い合うべきなのかを推断する。

最後に第七章「量子力学と力動論的世界観」では、ド・ブローイによって提出された、量子力学とベルクソン哲学を比較する議論を参照する。ド・ブローイは相対性理論が科学の最後の言葉ではないとし、量子力学とベルクソン哲学のいくつかの考えが調和しうるのではないかという問題を措定した。論者はこのド・ブローイの主張に対して基本的には賛同するが、そこには心的持続と物質の持続が同一視されるなど、ベルクソン哲学内部では幾つかの問題が存在することを指摘する。論者はまずベルクソンの物質規定の変遷を見て、物質の持続が形而上学的な仮説という弱い意味しかもっていないことを確認する。次に量子力学の数学的枠組みを概観し、シュレーディンガーの運動方程式に虚数が現れるため、そこには形式に意味を与える解釈やモデルが必要となることを示す。そして、ベルクソン哲学の物質の持続が形而上学的仮説であり心的持続のようにそのままリアルなものと思えないのは、量子力学のミクロ事象がそのままでは意味をなさない数学的形式であると同様であるという点を指摘する。そこから、現象記述を可能にする解釈やモデルの理論が必要になり、量子力学のいくつかの観測理論とベルクソン哲学の枠組みの類似点を見る。そしてこのような枠組みの類似点が出てくるのは、両者の理論がともに、古典力学やそれを基礎づけていた哲学が依拠する我々の知覚や身体のレベルをはるかに越えた所にまで探求を進めるためであることを確認する。そしてベルクソンが依拠してきた力動論は、諸事物の階層構造を考慮に入れ、このような階層を仮説によって構築していくものであり、これはまた科学と哲学との批判と協働という相補的な関係によって裏付けられている、という解釈を示す。

以上の論考を踏まえて、最後の「結論」では、このようなベルクソン哲学と科学の関係の特徴を、もう一度コントの実証主義哲学の方法論との比較のもとで明らかにする。ベルクソンが実在論を採用し、内観を重視するなどの点で、両者は異なるが、普遍的な還元主義に反対し科学の多様性を肯定することに関して両者は類似する。またベルクソンの科学万能主義に対する批判は、この延長線上にあるというのが本論の結論である。

論文審査の結果の要旨

本論はベルクソン哲学と彼の時代の実証科学との関係を分析し、この関係の観点からベルクソン哲学の生成のありさまを理解しようとした研究である。本論が扱うのは実証科学のなかでも主として物理学や力学であるが、生物学や心理学、幾何学についても論及されている。本論の趣旨は、ベルクソン哲学に特有な「哲学と科学の相補的關係」という発想の具体的な内容を検討することで、この哲学の独自性を明らかにすると同時に、哲学の方法論としてのこの発想の有効性を評価するところにある。

本論は七章からなるが、全体はベルクソンの初期の代表作『意識の直接与件についての試論』における、彼の理論の源泉を科学内部の諸議論に探る前半部と、その後の『創造的進化』や『持続と同時性』などの体系的形而上学の著作における、物理的自然像を検討する後半部とに分かれる。そして、前半の各章では、主に「時間」「空間」「力」「エネルギー」「エントロピー」「偶然性」などの基礎概念をめぐる彼の理解が論じられるのにたいして、後半の各章では相対性理論と量子力学に

たいするベルクソン哲学の関係が論じられる。前半はいわば彼の哲学の出発点を用意した歴史的背景の分析であり、後半はその体系化をもたらす20世紀の二大物理理論との関係の分析である。本論はこれら二種類の分析を通じて、ベルクソン哲学と科学との関わりの詳細を明らかにしようと試みているが、そのためにベルクソンのテキスト読解と並行して19世紀後半から20世紀初頭にかけての膨大な科学文献の調査を行っており、その結果は現代の内外のベルクソン研究との比較においても独創的とみなしうる、多くの知見をもたらしている。ここではその中でもとくに目覚ましい成果として、次の四点を挙げておきたい。

1 二種類の「多数性」について。ベルクソンにおいて、空間のもつ量的多数性と内的持続に属する質的多数性との区別は、この哲学の根幹にかかわる基本的なものであるが、この二種類の多数性の観点と科学理論との関係については従来いろいろな解釈が示されてはきたものの、総合的な研究はなされてこなかった。論者は多くの資料にもとづき、ベルクソンの見解に影響関係があるとされているアリストテレスの場所論、ゼノンのパラドックス、ライプニッツの無限小理論、リーマンの多様体理論、クルノーの連続性の理論など、きわめて多くの関係する側面を洗いなおし、この区別にたいする詳細な背景的説明を与えている。

2 エネルギー保存則とエントロピー概念、および計測不可能なエネルギーと非決定性の問題にかんして。これらの概念は19世紀後半に、科学と哲学の双方にとって非常に大きな意義をもつような一群の問題圏を形成したが、それぞれの内容や適用範囲については理論家によってさまざまな相違が見られた。本論はデュ・ボア＝レーモン、ジェイムズ、デュエム、ポアンカレ、ボルツマン、ブトゥルー、ブシネスクらの理論を網羅的に概観し、これらの理論とベルクソン哲学との関係についてそれぞれきわめて厳密な検討を加えた。その結果、ベルクソン思想のもつアクチュアリティが、これまでにない明快さで浮き彫りにされるようになった。

3 相対論にかんして。『持続と同時性』に見られるベルクソンによるアインシュタイン批判にかんしては、従来よりきわめて消極的評価を与えることが通例となってきたが、本論ではその批判がもつ重大な欠陥を認める一方で、アインシュタインの時空理論における固有時にたいする批判の有効性などを認めることで、より公平な評価を行っている。

4 量子力学的世界像について。ベルクソンにおける物質の持続の考えと量子論的世界像との類似については、物理学者のド・ブローイによる解釈が有名である。本論ではこの比較が、ベルクソンにおける物質の持続にかんする不正確な理解にもとづいている点を批判しつつ、類似点はむしろミクロのレベルでの認識と対象の相互作用という考えにあるとする。この評価も、ベルクソンと量子力学についての正確な理解にもとづいた比較として、これまでのベルクソン研究には見られない厳密さをもっている。

以上のように本論のベルクソン解釈はきわめて独創性の高いものである。本論の議論にあえて不満を述べるとすれば、「哲学と科学の相補性」という本論が目指すベルクソン哲学の発想が、哲学的に十分擁護可能なものであるかどうかについて、また、以上のような解釈とベルクソン哲学のもつスピリチュアリズム的傾向とは整合的なのかなどの点について、さらに徹底的な考察が必要ではなかったか、という疑問が挙げられるであろう。しかし、こうした欠点も論者の研究の今後の進展によって補われるものと期待される。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2007年10月1日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。